

Epiphanies

その瞬間

No. 14

私の研究を育んだ 「現場主義」の精神

子どもの頃から理数系が得意で、将来は発明家か研究者になるのが夢でした。中学の頃からはアインシュタインに憧れ、物理学の道に進むつもりでしたが、大学入学後、数学で躓いて断念しました。これが自分にとっての最初の転機と言えるかもしれません。結果的に農学部を選んだのは、キリスト系の幼稚園に通っていた頃、博愛の精神を学んだ影響もあったと思います。高校時代にはエチオピアの飢餓について書かれた本を読み、自分も途上国に行って役に立ちたいと真剣に考えたこともありました。こうして学び始めた農学は、私の好奇心や向学心を大いに刺激し、結局、修士課程、博士課程へと進むことになりました。



インドネシア西カリマンタン、シンタン村の子どもたちと
(1980.4)



国際農業開発学研究室

岡田 謙介 教授

Kensuke Okada

修士2年になる前の春休みに、台湾、マレーシア、フィリピン、インドネシアを1人で40日かけて旅しました。宣教師が乗ったセスナに同乗してボルネオの奥地にも行きました。おこがましい話ですが、私は飢餓をこの目で確かめようと思っていたのです。ところが、私が現実に目の当たりにしたのは経済レベルこそ低いものの、飢餓どころか、日々の生活をエンジョイする現地の人々の姿。このとき、私が痛感させられたのは、農学の研究者は大学に留まって研究に没頭するだけではなく、自ら足を運んで現場を体験しない限り、真実は見えてこないということでした。

ポストドク時代にインドの「国際半乾燥熱帯作物研究所」(ICRISAT)に入ったのも、現場を見ながら研究に従事したかったからです。ICRISATは「緑の革命」を起こした一連の研究機関の一つで、当時は日本では正しく理解されていなかったため、多くの人にインド行きを反対されました。しかし、ここで過ごした4年間は私の大きな財産です。世界最高水準の研究所で、各国から集まった優秀な研究者と共に、現地の厳しい環境下でいかに生産性の高い作物を作り、農家の生活向上に資するかを研究しました。その後、コロンビアにある同系列の研究機関「国際熱帯農業センター」(CIAT)に赴任し、5年にわたって陸稲の酸性土壌耐性の研究に従事しました。

母校である東大の農学部で教鞭を取るようになったのは今から12年前。研究室の学生たちにもとにかく一度は現地の人たちと交流すること、つまり、「現場主義」で調査・研究活動をする重要性を説いています。幸いにして、そのような志を持った学生が集まっているので心強い限りです。